

「南部菱刺し」に関する調査 製作者の現状について

著者	川守田 礼子
著者別名	KAWAMORITA Reiko
雑誌名	八戸工業大学地域産業総合研究所紀要
巻	15
ページ	21-29
発行年	2017-03-31
URL	http://id.nii.ac.jp/1078/00003760/



「南部菱刺し」に関する調査 — 製作者の現状について —

川守田 礼子*

論文要約

「南部菱刺し」は青森県南部地域に継承されてきた伝統的手仕事である。本研究では、南部菱刺しの製作者へのインタビュー調査を通して、製作者の現状を明らかにするとともに、青森県南部地域の衣食生活文化と地域的背景について考察することを目的とする。

キーワード：南部菱刺し，伝統的手仕事，製作者

Research of "Nambu Diamond Embroidery" — Current State of Craftswomen —

Reiko KAWAMORITA*

ABSTRACT

"Nambu Diamond Embroidery" is traditional handwork inherited in the Nambu region of Aomori prefecture. This study aims to unveil the current state of craftswomen and consider the clothes life culture and regional background of the Nambu region of Aomori prefecture through interview researches with craftswomen of the Nambu Diamond Embroidery.

Keywords : *Nambu Diamond Embroidery, traditional handwork, craftswomen*

1. はじめに

青森県南部地域では、寒冷な風土と農耕に根ざした生活文化の中で、南部裂織や南部菱刺しなどの伝統的手仕事が発達してきた。これらは、過酷な農作業にさらされる作業着・日常着を補修し保温性を高める工夫として伝承されてきた技術であり、木綿の栽培が困難な北東北において貴重な繊維製品を最大限活用するためには必然的な知恵であったという点で、南部地域の生活と強く密着したものといえる。高度経済成長期以降の経済・産業・生活様式の変化にともない、これらの伝統的手仕事は生活の中から急速に失われていった。かつて家庭の衣生活を維持するための必須仕事として女性に課せられた南部菱刺しの本質は、いまや完全に失われている。現在、南部裂織や南部菱刺しはいずれも青森県伝統工芸品に指定されており、地域の魅力づくりにつながる文化資源・観光資源として注目されている。しかし、南部裂織や南部菱刺しを対象とした先行調査・研究は乏しく、関連文献も少ない。歴史学、民俗学、服飾学的な研究が主で、製作の現状に関する調査・研究は十分ではなく、現在の製作者や製作団体の実態に関してはあまり明らかになっていない。

本研究では、青森県南部地域の伝統的手仕事の現状に関する調査・研究の第一段階として、まずは南部菱刺しを取り上げる。南部菱刺しの歴史の変遷や技法に関する文献調査を行ったのち、南部菱刺し製作現場における実地調査を実施し、製作者や製作団体の現状を明らかにしたい。また、南部地域の生活文化の移り変わりが、現在の製作状況や製作者の意識にどのように影響を与えているのかについても探り、製作者を支える環境づくりや次世代への技術継承、地場製品の振興を考えるうえでの課題を明確にしたいと考えている。

2. 南部菱刺しについて

南部菱刺しは、八戸市、上北郡、三戸郡の青森県南部地域および岩手県北地域で発達した伝統的手仕事である。八戸市博物館『ひしぎし - 南部女性の美 -』では、南部菱刺しを次のように定義している¹⁾。

「ひしぎし」は、布に糸を刺して作る菱形の模様です。もともとは、衣類の補強や風通しを防ぐ防寒のために刺す刺し子の一種ですが、やがてその美しさを表現し、装飾を兼ねるようになりました。

南部菱刺しは、津軽地域のこぎん刺しと並び、青森県の地域性を活かして発展した染織品の代表的なものと称される。いずれも寒冷地において衣類の補強、保温を目的として行われた刺し子だが、こぎん刺しが布の偶数目を拾って刺すのに対し、南部菱刺しは偶数の布目に刺す

点が技法的特徴である。模様も多種あり、地域ごとに種類や呼称が異なった。また、色毛糸を使用する点も南部菱刺しの特徴で、カラフルな刺し模様が美しい前掛け(写真1)は祭事の装いとして娘たちを彩った。南部菱刺しに関する文献記録が極端に少なく歴史は明らかではないが、江戸時代後期から始まり、明治時代の隆盛を経て、一部地域では昭和初期まで行われていた。写真2は、大正末期に五戸町で撮影された写真で、左側の娘が南部菱刺しの前掛けをしている。しかし昭和以降は、手間のかかる刺し子によって生活着を維持する必要がなくなったため、南部菱刺しは実用価値を失い急速に衰えていった。昭和初期から始まった民藝運動の中で南部菱刺しの美しさが再評価され、作品の保存収集や技術の継承活動が積極的に行われた結果、南部菱刺しが今日まで生命を保つこととなった。

南部菱刺しに関する先行調査・研究について大まかに記しておく。

まず、青森県史編さん文化財部会による青森県の染織工芸調査が1996年から約10年間実施され、成果が『青森県史文化財編 美術工芸』にまとめられているほか、調査にあたった濱田淑子の論文等に詳しく記載されている。これにより歴史や発達経緯、分布や地域差、技法の特色や服飾展開、保存収集や継承活動など南部菱刺しの概要を知ることができる。昭和以降の保存収集・継承活動に尽力した人物として、八戸郷土研究会を創立した小井川潤次郎、民俗研究家の田中忠三郎、民藝運動関連の湯浅八郎・相馬貞三・濱田喜四郎・山村精、小川原湖博物館関連の渋沢敬三・杉本行雄・中道等らの名が挙げられている。また、復興を支えた製作者として、西野こよ、故松岡加恵、川村芳枝、八田愛子、鈴木堯子の名が挙げられている。このうち、八田愛子、鈴木堯子は、ともに県外出身者で夫の転勤等で八戸に滞在した間に復興・製作活動に携わり、『菱刺し模様集』および『新技法シリーズ 菱刺しの技法』の2冊を出版した。これらの書籍は現在絶版により入手困難だが、特に『菱刺し模様集』と田中忠三郎著『南部つづれ菱刺し模様集』(写真3)は、南部菱刺し模様を網羅的に集録した文献が他にないため



写真1 菱前掛け (田中忠三郎蔵)²⁾

大変貴重で、現在の製作者が常に手元に置いて参考にするバイブル的な文献となっている。

東北地方の刺し子の総合的研究としては、徳永幾久『刺し子の研究』、山本 昭子・山田 いずみ「東北地方の刺し子の研究」などが詳しい。前者は、山形県の刺し子を中心に、刺し子文化の徹底した悉皆調査の成果をまとめた、膨大な質量の論考である。民俗服飾、衣生活史という観点から、刺し子文化の背景に横たわる衣料窮乏の農民生活に関する記述が詳細で参考になる。後者は、東北地方六県の刺し子や文献の調査収集に基づき、模様形態、技術、歴史的地理的背景といった総合的見地から検討を行っている。他にも、刺し子の美の特性や模様特性などデザイン学的アプローチによる研究も始まっている。



写真2 菱前掛けの娘³⁾

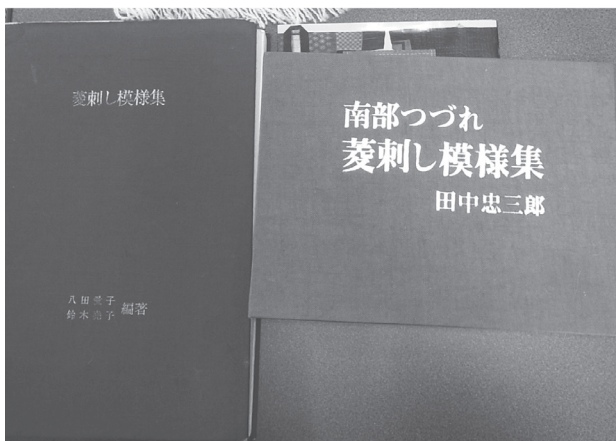


写真3 『菱刺し模様集』と『南部つづれ模様集』(高橋博子蔵)

3. 調査概要

3.1 調査目的

南部菱刺しが現在どのように製作され、技術継承がなされているか、製作者や製作団体の現状を明らかにする目的で、製作現場における実地調査を実施した。

3.2 調査先

調査先を表1に示す。青森県庁「青森県伝統工芸品・製造者一覧表⁴⁾」記載の製作者(伝統工芸士)は2017年1月6日現在、西野こよ(西野刺っ娘の会)、天羽やよい、高橋博子、南部ひしざし七戸町保存会、故松岡加恵(ぐるーぷまつおか菱刺し研究会)である。本調査では西野こよ(西野刺っ娘の会)、天羽やよい、高橋博子を対象とし、若手作家の山田友子を加え、計4カ所で調査を行った。

表1 調査先一覧

製作者	所在地	調査訪問日
西野こよ	八戸市長苗代	2016年11月26日
天羽やよい	八戸市売市	2016年12月8日
高橋博子	五戸町	2016年12月9日
山田友子	八戸市田面木	2016年12月1日

南部菱刺しに関するアンケート調査票		回答日	2016年	月	日
このたびはご協力ありがとうございます。以下の欄にご記入ください。					
1	南部菱刺しとの出会いについてうかがいます。 いつ、どのような機会に知りましたか?どこに興味を持ちましたか?なぜ、製作者になろうと思いましたか?				
2	南部菱刺しの技術習得についてうかがいます。 ①菱刺しの技術はどのように学習されましたか? ②菱刺しの技術の特色はどこにありますか?(他の刺し子や刺しゅうとの違い)				
3	南部菱刺しの作品制作についてうかがいます。 ①制作を始めてからどのくらいですか? ②これまでどのような作品を作られましたか?No.1の作品とは何ですか? ③制作された作品はどのように活用されていますか?(例:発表会、日常使いなど) ④ご自身の作品に対する周囲の反響はいかがでしたか? ⑤制作の際に最も力を入れているのはどこですか?(例:色彩、模様構成、加工等) ⑥制作のアイデアはどこから生まれていますか?発想のヒントはありますか? ⑦制作される時間帯、場所、時間数、また、年間の制作点数を教えてください。				
4	南部菱刺しの製作者としての意識についてうかがいます。 ①製作に携わってみて実感なされた面白さと難しさとはどのような点ですか? ②今後、どのような作品制作を目指していますか?目標としている作品や取り組んでみたいと思っている事柄などはありますか? ③青森県工芸品としての菱刺しの未来についてご意見をお願いします。 ④菱刺しの他団体の製作者や、他の刺し子(こざん刺しや庄内刺し子など)製作者との交流はありますか?必要だと思いますか?				
5	若い世代や大学に対して要望や期待することはございませんか?				
6	最後に、ご自身についてうかがいます。※さしつかえなければお書きください。				
お名前					
お住まい		八戸市内	三戸郡()	その他()	
ご出身		八戸市内	三戸郡()	その他()	
年代		30代	40代	50代	60代 70代 80代
ご記入ありがとうございます。データは厳重に管理のうえ、研究以外の目的に使用いたしません。 八戸工業大学感性デザイン学部感性デザイン学科 川守田研究室					

図1 アンケート調査票

3.3 調査方法

南部菱刺し製作者を直接訪問し、インタビューによる調査を行った。また、記述式のアンケート調査を並行して行った。図1は使用した調査票である。

4. 調査報告

4.1 西野こよ・西野刺っ娘の会

2016年11月25日に西野和裁菱刺塾を訪問調査した。西野自身は高齢で病気のため調査回答は困難とのことで、会員8名にアンケート調査を行った。写真4は西野和裁菱刺塾、写真5は西野刺っ娘の会会員、写真6は教室での作業風景である。

まず、南部菱刺し西野刺っ娘の会の主宰者、西野こよの経歴について、『西野こよ南部菱刺し』を参照しながら以下に簡単に紹介する。西野は三戸郡福地村（現南部町）に生まれ、八戸市商工会議所で開催された「菱刺し講習会」において工藤テツ、風穴すゑから菱刺しを学んだ。以降、長年にわたり南部菱刺しの指導者として活躍してきた。1974年に西野和裁菱刺塾を開設し、翌1975年に西野刺っ娘の会を主宰し、多くの弟子の指導にあたってきた。

作品製作にも精力的に取り組み、国内外の数多くの工芸美術展に出展し高い評価を得てきた。特に、伝統的な作品にはない、新しい表現からなる絵画的な作品群は独自の世界を築く。これまで八戸市美術館での個展のほか、八戸地域地場産業振興センター・ユートリー「南部八戸ひしざし今昔展」、八戸市文化協会の生活文化展など多くの展示会を開催するほか、ユートリーに実演コーナーや菱刺し教室を開設するなど南部菱刺しの振興に尽力してきた。

また、西野は古い南部菱刺しの収集・保存も行っており、西野和裁菱刺塾に隣接する菱繡館には貴重な古作が収蔵されている。訪問当日にはその中の数点を拝見した。写真7は、南部菱刺しに特徴的な浅葱色の麻布に、白糸と黒糸を交互に用いて縞模様に刺したもので、明治時代の作と伝えられている。数本撚った刺し子糸ではなく、普通の縫い糸（カンナという）で細かく刺してあり、昔の人の緻密で正確な手わざに目を見張った。

では、以下に調査の結果をまとめる。図2に会員8名の住まい、出身地、年代、製作歴の内訳を示した。全員女性で、年代は熟年層が多い。半分が10年以上の経験者である。



写真5 西野刺っ娘の会会員



写真6 教室での作業風景



写真4 西野和裁菱刺塾



写真7 明治時代の菱刺し

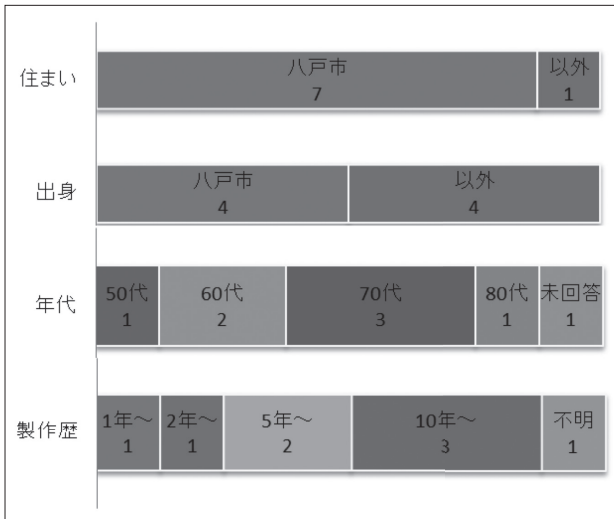


図2 回答者の内訳

1) 契機

南部菱刺しとの出会いは、公民館等の講座に参加した(2名)、友人に誘われた(2名)、学校の授業で体験した(1名)、展示会で作品を見た(1名)、八戸市に嫁して知った(1名)、近くに先生がいた(1名)などさまざまである。製作の動機は、菱模様の幾何学的な美しさに魅力を感じたから(5名)が最も多く、他に、地元の伝統工芸だから、時と場所を選ばず自分に合った製作ができるから、手仕事やものづくりが好きで製作に没頭することで心の安らぎが得られると思ったから(各1名)などが挙げられた。

2) 技術習得

全員が教室で西野や先輩からの指導を受けて習得している。初心者はまず、図面おこし、菱刺しの基本模様をまとめた基本刺しを通して、針の扱い方、糸の扱い方、糸の始末などを学ぶ。

3) 製作状況

製作物として挙げたのは、タペストリー・掛軸・のれん・衝立・屏風・額・色紙掛け・テーブルセンターなどの室内装飾品、前垂れ・帯などの服飾品、巾着・ポーチ・バッグ・名刺入れ・髪飾りなどの雑貨・小物類などである。製作した作品は自身で日常的に使用するほか、展示会への出展、知人への贈答品などに用いている。中には公募展等に応募しているベテランもいる。写真9は、2016年11月18～20日八戸ポータルミュージアムはっち開催「はっち市2016」に出展した様子である。年間の作品数は大規模作品で数点、小物類で20～50点ほどで、高齢の会員は製作数が少ない。製作時に力を入れている点として全員が色彩構成を挙げており、次いで模様構成(6名)、生地や糸の選び方・組み合わせ方(2名)、糸の扱い方(1名)である。会員全員が日頃から、他人の作品、雑誌・テレビなどのメディア、自然物、絵画などを見て製作のための勉強を重ねていることが分かった。

4) 製作者意識

ほとんどが趣味として行っている。製作の魅力として、長い時間をかけて作品が完成していくこと(3名)、布・糸・模様の組み合わせで多様な表情をみせてくれること(1名)、製作に携わらなければ知ることのできない奥深さがあること(1名)、何も考えずに淡々と刺すことで忍耐と持続力が養われること(1名)などが挙げられた。工芸品としての未来を考えるうえで、後継者が少なく積極的に後継者を募っていない、閉鎖的である、指導方法が系統だっていないなどの問題点を指摘する声もあった。

5) 交流状況

他の製作者や他団体とは、イベントの見学や個別の情報収集程度で、密接な交流、定期的な交流はあまりないようである。菱刺し製作の可能性を広げるため今後は積極的に交流を図りたい(4名)という意見があった。



写真9 はっち市出展

4.2 天羽やよい

2016年12月8日に天羽やよいの自宅兼工房「梅の花工房」を訪問調査した。都合によりインタビューのみの調査とした。以下に調査の内容をまとめる。

天羽は東京都荒川に生まれ、結婚を機に八戸市田面木に居を移す。翌年、集団検診を受けた際にレントゲン技師に声を掛けられ、南部菱刺しを紹介した雑誌を見せられ、ぜひ田舎の古老を探して菱刺しを習うよう強く勧められる。針仕事には関心はなかったが、その後、偶然古書店で見つけた田中忠三郎著『南部つづれ菱刺し模様集』を入手したことで、南部菱刺し製作の人生が始まった。誰に弟子入りするわけでもなく、模様集を参考にしながら家業の雑貨屋の合間に刺す日々を続ける。一人暮らしになってからは、八戸市売市の自宅兼工房で、弟子の指導にあたりながら、作品製作を行っている。東京や京都など大都市での展示会も開催され、全国各地に天羽の作品を待ちわびるファンが多い。

天羽の作品には模様構成や配色に独特の世界がある。端正で余人を寄せ付けない崇高さが漂う。刺し糸には草木染のものを使用しており、現在は主に自分で織った帯

地に刺している。一日のほとんどの時間を刺して過ごしているという。しかし、1995年に発生した阪神淡路大震災の際、あまりの衝撃で針が持てなくなった。手から針が離れたのはその数日だけと言う。

「刺す」ことは自分にとって「doing」ではなく「being」であると語る。まさに南部菱刺しと一体化した人生とあってよいだろう。一作品を制作し終わるとすぐ次の作品を手掛けたくなり、天から降りてくるかのように既に何を刺すかは決まっているようだ。普段からデザインのアイディアは思いついたらメモするようにしているが、色彩や模様構成に悩むことはない。天賦の才の持ち主である。

天羽は総刺しにこだわっている。総刺しとは、単一の菱模様のみをワンポイントで刺すのではなく、反物の幅いっぱい刺しを繰り返していくもので、大変時間がかかる。よって、天羽が年間に製作できる量は限られているという。しかし、この総刺しでなければ、南部菱刺しが何たるかが絶対分からないと断言する。厳しい労働に毎日さらされた農村の女性たちが、夜、家族や自分の衣類を一針一針刺している間だけ感じていたであろう心の静けさ、その境地は総刺しを何年も続けた者でなければ実感できない。日常の労苦から救われる唯一の時間であり、禅的な効果があったのではないかと推測する。それは一定の幅を絶えず往復する総刺しでなければならなかったのだと強調する。

今後の南部菱刺しの在り方に関して天羽は苦言を呈する。民藝運動の影響を受け復興を遂げた南部菱刺しだが、天羽は「あのままあの時、消えてしまった方がよかったですのではないかとあえて言う。物資が乏しく、生きるか死ぬかの窮まった生活環境だからこそ生まれた南部菱刺しの本質を、この豊かな時代にあってどれだけ引き継ぐことができるだろうか。そのような歴史的背景を無視し、模様刺しを単なるデザインとして扱うような、菱刺し本来から離れた現在の在り様は、もはや菱刺しではなく刺繍であると批判する。しかし菱刺しの本来を護持しようとすれば商売としては成り立たず、過去の遺物として消え去るしかないという南部菱刺しが抱えるジレンマを鋭く指摘した。ありのままの継承か現代での生き残りか、南部菱刺し製作の前線に立っているからこそその厳しい提言と受け止めた。南部菱刺しの何を後世に伝えるのかという原点に戻ることも今後必要であると思われる。また、これに関連して、「刺す」「綴る」という行為の根源的な意味、日本人の精神世界との関わりについても追究していきたい。

4.3 高橋博子

2016年12月25日に五戸町の高橋博子の工房（写真10）を訪問調査し、インタビューとアンケート調査を行った。以下に調査の内容をまとめる。

高橋は、五戸町出身で60代である。天羽やよいに師

事し、その元で13年間教えを受けた。30代の頃に南部菱刺しという名称を知ったが、どういうものか全く分からなかった。刺繍や刺し子などを体験してみたが物足りなさを感じていた。43歳の時に五戸町公民館で実施している町民向け講座の中に南部菱刺し教室を見つけ、飛びついた。以来23年間、一度も「飽きた」「止めよう」と思うことなく、今日まで製作を続けてきた。

工房はおおよそ6畳ほどの広さで、作品や材料が所狭しと収納されている。師である天羽の作品が大切に飾られており、師への敬意が感じられた。高橋はこの工房で1日6～7時間製作を行っている。眼の負担を考慮し、午前3時間、午後3時間、夜2時間以内に止めている。ノートにびっしり書き込まれた図案に基づき、自身で染めた草木染の刺し糸で刺している。茜、藍、胡桃、山ぶどうなど自然の植物で染められた刺し糸が、専用ケース一杯に収められていた（写真11）。現在は2017年八戸市内で開催予定の個展に向けての作品製作に取り組んでいる。これまで製作したタペストリー、帯、前掛け、ポシェット、ポーチ、名刺入れ、ストラップなど大小さまざまな作品を拝見した。作品製作のほか、教室での弟子の指導、学校や観光ツアーにおけるワークショップなどを行っている。最近では、百貨店からの出展打診もあったそうである。

南部菱刺しの魅力は言い表すことができないと語る。麻布に木綿糸を刺すことにより布が柔らかくなる、その柔らかさは赤子に着せられるほど優しく、そこに昔から変わらぬ母の愛を感じるという。他の製作者にも共通しているが、「刺していると楽しい」という素朴な感覚が最も重要なようである。作品製作に際し、模様構成や配色に2～3ヶ月も悩みぬくが、一つ仕上がるとすぐ次の作品を刺したくなる。また、南部菱刺しは、糸がふっくら渡るように「よりもどし」をかけて丁寧刺される点、途中で模様を自由に変えられる点が独特の魅力であるという。

しかし、伝統工芸品として南部菱刺しが今後どのくらい残っていくのかについては不安を感じている。刺し方



写真10 高橋博子の工房

を少し覚えるとすぐお金にしようとし、その先の勉強をしないからである。菱刺しの基本模様をまとめた基本刺し(写真12)を最初の数ヶ月をかけて弟子に教えるが、短時間でさらっと刺してくる場合もあるし、基本刺しのみで菱刺しを止める場合もあるそうである。刺すことへの向き合い方が人さまざまだと語っていた。基本をどれだけ丁寧にさせるか、時間をかけて物を作るということとどれだけ真剣に向き合えるかが、南部菱刺しを製作する上で重要になるということであろう。なお、師の天羽や同門とは交流があるが、それ以外はないようである。



写真11 自作の草木染刺し糸



写真12 基本刺しの見本

4.4 山田友子

2016年12月1日に山田友子の自宅兼工房を訪問調査し、インタビューとアンケート調査を行った。以下に調査の内容をまとめる。

山田は、八戸市出身で40代である。菱刺し作家として地元で活動している中では最も若い。高橋と同様、天羽やよいに師事し、製作を始めてから12年となる。30代前半に中東の絨毯、インドの染物や手織物から手工芸に興味を持ち、郷土の工芸をやってみようと思ったのが契機である。自宅のリビングの一角を仕事場、隣の一室を材料や作品の収納スペースとして使用している。「菱

刺しは机と椅子だけあればできるのがよい」と語っていた。製作時間は1日4時間、年間製作数は50~100点ほどである。山田も刺し糸は自分で染めており、染色のワークショップなども行っている。

山田は、2011~2013年、八戸ポータルミュージアムはっちに工房「つづれや」を構え菱刺し製品を販売するほか、2011~2012年はっち市実行委員長を務めた。菱刺しワークショップの実施、県内外の展示会開催、雑誌やテレビ等での菱刺し紹介など幅広く活動している。直近では2016年11月8~13日東京都浅草のアミューズミュージアムにおいて「南青森のイロドリ 菱刺し展」を開催し、好評を博した。図3は展示会チラシ、写真13は展示会の様子を山田が撮影したものである。また、名久井農業高等学校で南部菱刺しの指導にもあたり、女子高生とともに野菜や果樹をモチーフとしたオリジナル模様を開発するなど新しい試みにも果敢に挑戦している。

作品内容にはこれまでにないような展開が見られ、革工芸作家の夫とのコラボによるバッグやトレーをはじめ、若年層にも訴求するようなデザイン性の高い作品を多く発表している。製作の際に最も力を入れているのは、色彩、模様構成、加工である。色彩と模様構成という点は他の製作者と共通しているが、加工を挙げているところに山田の個性がある。日常使いできる物に南部菱刺しをどのように活かすかに力点を置いて作品制作を行っている。訪問した際に玄関で使用していたのも自作の菱刺し模様のマットであった。こうした取り組みが評価され、国内メーカーの商品デザイン監修など新たな事業への参与も打診されているそうである。

このように多方面で活動しているので、同じ菱刺し製作者のほか、こぎん刺しや庄内刺し子の製作者、染織関連のデザイナーなど人的交流も活発である。南部菱刺しに関する研究にも熱心で、三巾前掛け・股引など古作を収集するほか、古作を有する県内外の施設をよく訪ね歩いている。写真14は入手した古い股引である。そうした活動を通して「古作にはかなわない」と語る。当時貧しい農家で必要に迫られて刺していた物と、現代の作品では全てが違いすぎるというのである。そのうえで、菱刺し作家として、自分なりの味を出し、誰が見ても製作者が分かる個性を持った作品製作を目指したいと意欲的である。また、南部菱刺しは製作に時間がかかるので、それに見合う価格で製品が販売されることが必要だと述べる。製品価格やマーケティングの問題は伝統工芸品・伝統工芸士の未来を考えるうえで重要である。

最後に、山田は「ワインに例えると、こぎん刺しはポルドーで、南部菱刺しはブルゴーニュである」と表現した。ポルドーは外部に対するプレゼンが上手く親しみやすい印象、ブルゴーニュは高価でどちらかといえば自分のためのものという印象、というのである。これには南部菱刺しを取り巻く地元の姿勢に対する批判的な視点が

含まれている。菱刺し製作者がどのような革新的な取り組みを行っても、地元にはそれを評価し後押しするムーブが生まれてこないというのである。この無関心の背景には、南部菱刺しの歴史的な事情が影響していると天羽も山田も指摘する。南部菱刺しは農村の忌むべき貧しさの象徴であるという根強いイメージにより、今なお南部菱刺しに対する地元の目が冷たいというのである。実際に南部菱刺しの復興に尽力した人には、前述した八田、鈴木、天羽など地元以外の出身者が少なくない。天羽の製作した帯が宮内庁買取に決まった際も地元の反応はほぼなかったそうである。南部菱刺しの価値を地域の文化資源として外部発信するためには、こうした状況を改善し、地元の理解を進め、振興のための協力体制を整えることが急務である。

5. まとめと展望

以上のとおり、南部菱刺し製作者への調査の結果について報告した。今回の調査実施によって、南部菱刺し製作の現在の一端を切り取ることができたと考える。それぞれの製作者の南部菱刺しへの想いに直接触れることができ、大変感銘を受けた。特に、製作者の人生における南部菱刺しの重みに圧倒された。刺す作業の中に製作者が自分自身と向き合う時間を見出しており、これは手仕事の本質に関わる重要な効果である。製作者にとっての南部菱刺しは、伝統工芸品、売買される製品、趣味の作品というモノ的側面を持ちながらも、自分の精神と不可分の拠り所的存在として機能していることが分かった。この点を踏まえ、製作者へのインタビュー調査をより深化させ、個々のライフストーリーとしてまとめることも、南部菱刺し製作の実態把握へとつながるのではないかと考えている。

反面、南部菱刺しの工芸品としての今後を考えるうえでの問題点も浮き彫りになってきた。一般的な認知度の低さ、後継者不足、手間と製品価格の釣り合い、振興を支える地元の体制づくりの必要性など多くの課題が挙げられる。また、製作者同士の交流も十分ではなく、地域ブランドとしての結束力向上につながるネットワークづくりが今後必要かもしれない。ただし、製作者の一人が「菱刺しは内向する」と語ったように、刺すという作業自体に個の世界に没入せざるをえない性質があるという点も見逃せない。これは刺し手に癒しをもたらす南部菱刺しの特徴でもあるのだが、製作現場に閉鎖的な空気を

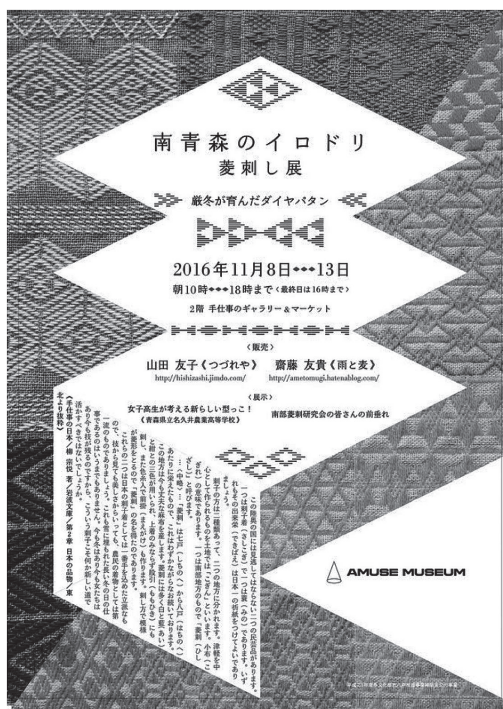


図3 東京での菱刺し展



写真13 菱刺し展の様子



写真14 菱刺しの股引

生む要因にもなっているのではないだろうか。そもそも南部菱刺しが根本的な矛盾をはらんでいることも今回の調査で指摘された。前時代の生活と密着して存在した南部菱刺しの本質を、生活様式や価値観が大きく変化した現代にあって、どのように捉え、どのように維持すればよいのかという問題はなかなか難しい。これは「伝統」と名のつくもの全てが共通して抱える問題とってよいであろう。

今後はこうした観点も含みながら、以下のような調査・研究に継続的に取り組んでいく予定である。

- 1) 南部菱刺し製作者・体験者への追加調査
- 2) 南部菱刺し作品保存施設への訪問調査
- 3) 南部農村地域の衣生活文化全般に関する文献調査、聞き取り調査
- 4) 津軽地域のこぎん刺し関連施設および製作現場への訪問調査、こぎん刺しとの比較分析

上記の調査・研究を通して、青森県南部地域の衣生活文化を背景とした南部菱刺しの在り方をさらに深く追究していきたい。

謝 辞

本調査にご協力くださいました製作者の皆様へ改めて厚く御礼申し上げます。

引用文献

- 1) 八戸市博物館：『ひしぎし－南部女性の美－』、八戸市博物館、p.3、1990.
- 2) 八戸市博物館：『ひしぎし－南部女性の美－』、八戸市博物館、p.6、1990.
- 3) 八戸市博物館：『ひしぎし－南部女性の美－』、八戸市博物館、p.4、1990.
- 4) 青森県庁ウェブサイト「青森県の伝統工芸品」：<http://www.pref.aomori.lg.jp/sangyo/kensan/DENTO.html>

- 5) つづれや：<https://hishizashi.jimdo.com/> ブログ /28年下半期 /

参考文献

- 1) 八戸市博物館：ひしぎし：南部女性の美、八戸市博物館、1990.
- 2) 青森県史編さん文化財部会：青森県史文化財編 美術工芸、青森県、2010.
- 3) 濱田淑子：津軽こぎん・南部菱刺し - 工芸美の発見から再興のみちすじ、青森県史研究、7号、pp.84-105、2002.
- 4) 濱田淑子：「津軽こぎん」と「南部菱刺し」、民俗芸術、19号、pp.114-125、2003.
- 5) 濱田淑子：「津軽こぎん刺しと南部菱刺し」 - 青森県史染織調査を担当して -、民芸の心を学ぶ講演記録集、第140回日本民藝夏期学校青森会場、pp.39-70、2012.
- 6) 八田愛子、鈴木堯子：菱刺し模様集、菱刺し模様集刊行会、1980.
- 7) 八田愛子、鈴木堯子：新技法シリーズ 菱刺しの技法、美術出版社、1989.
- 8) 田中忠三郎：南部つづれ菱刺し模様集、北の街社、1977.
- 9) 徳永幾久：刺し子の研究、衣生活研究会、1989.
- 10) 山本 昭子、山田 いずみ：東北地方の刺し子の研究 (その1) - 刺し子、こぎん刺し、菱刺しについて -、生活科学、13号、pp.101-121、1982.
- 11) 青森県庁：<http://www.pref.aomori.lg.jp>
- 12) 西野こよ：西野こよ南部菱刺し、菱繡館、2007.
- 13) 文化出版局：「梅の花」ほころぶ 天羽やよいの菱刺し - 青森県・八戸にて、季刊銀花、第137号、pp.44-49、2004.
- 14) つづれや：<https://hishizashi.jimdo.com/>
- 15) AMUSE MUSEUM：<https://www.amusemuseum.com/>